芥川龍之介とフロベールの動物 I
――芥川の犬から――

青　木　謙　三

I　はじめに

芥川龍之介とフロベールのふたりが描く動物（妖怪などを含む）を比較し、両作家の特性を明らかにすることが最終の目的である。

芥川[1)]には鳥や虫や獣、それに類した存在が頻出する。作品のタイトルを見ても「虱」「酒虫」「猿」「貉」「蛙」「蜘蛛の糸」「犬と笛」「龍」「馬の脚」「河童」などがあり、「白」は犬の名前を題とする。これらの動物ないし怪異な存在は、「河童」にみられるごとく、多くは擬人化されている。例をあげれば、永井荷風を想わせる作品、「老人」には、炬燵布団のうえに香箱を作った白猫を相手に、それが愛する女でもあるかのように語りかける男が出てくる。さらに「虱」では「一船の裸侍は、それ自身が大きな虱のように、寒いのを我慢して、毎日根気よく、そこここと歩きながら、丹念に板の間の虱ばかりつぶしていた」とある。

フロベール[2)]については、題名に動物を想わせる作品はないものの、初期作品の動物の描写からめぼしいものを挙げれば次のごとくである。以下、同じ作品からの引用が続くときは略号 OJ. と頁のみを記す。

故郷のアフリカを懐かしむライオン（「この香を嗅げ、または軽業師」OJ. 107-108）。誰よりも悲しんで主人の葬列に従う犬（「激怒と無力」OJ. 178-179）。錬金術師アルチュールがジュリエッタを坐らせる牝牛（「地獄の夢」OJ. 225）。主人公ジャリオがなりたいと願う美しい白鳥（「汝何を望まんとも」OJ.

263)。囚われ者は鎖につながれた狼（「ルイ11世」OJ. 312)。走りすぎて死ぬ馬（OJ. 345)。飢えと寒さで死ぬ馬（OJ. 349)。死体を踏んで進む馬（OJ. 352)。天が老いた死神にくれた、鉄のひかがみとブロンズの頭の馬（「死者の舞踏」OJ. 421)。語り手が幼い頃あこがれた、湯気のような吐息を出し、汗だくで走る馬たち（「狂人の手記」OJ. 469-470)。夢想にふける語り手は、くつわのとれた牝馬（OJ. 474)。ガルガンチュアがその乳を飲んだ多くの乳牛（「ピレネー・コルシカ紀行」OJ. 649)。山道を懸命に登る馬達（OJ. 673)。国境で頭上を舞う鷲達（OJ. 673)。網の中で様々な色に輝く小魚（OJ. 684)。コルシカの羊と犬と豚（OJ. 698)。アラブ馬に似たコルシカ系の馬と、それに数段劣るサルディニア系の馬（OJ. 699)。私の虚栄心、何という野生のハゲタカ（OJ. 736)。愚かなのは、長い耳を自慢するロバ（OJ. 754)。下界のすべてに超然として羽ばたく鷲（「十一月」OJ. 768)。マリーを魅する、愛し合う鳩や馬や羊達（OJ. 800-801)。寵姫になりたいマリーが惹かれる、絡み合う蛇や吼え合うライオン（OJ. 807)。マリーを知った自分は、すぐには楽なトロットで走れない駄馬（OJ. 768)。黒いスパニエル犬（「感情教育（1845)」OJ. 918)。ジュールは檻の熊（OJ. 956)。ジュールの情熱や渇望は野生の牝馬（OJ. 956)。霊的なエゴイズムを味わうジュールは雲の中の鷲（OJ. 961)。愛するアンリとエミリーは、岸に寄らない湖の白鳥（OJ. 969)。ジュールを執拗に追う神秘的な犬（OJ. 1025-1031)。夢のなかで母と散歩する私を囲む猿たち（「イタリア紀行」OJ. 1091)。アザラシやセイウチ（「博物学作文」OJ. 1127-1128)。アリクイ（OJ. 1129)。

擬人化が多く、馬や鷲への言及が目立つが、或動物の個体のもっとも長い叙述は、「感情教育（1845)」の神秘的な犬の描写であって、プレイアッド版で六頁に及ぶ。初期作品を離れ、フロベールの作品全体を想い浮かべるとき、『三つの物語』に収められた「まごころ」の主人公フェリシテが飼う、彼女が臨終の際幻に羽ばたくオウムと、やはり『三つの物語』の「聖ジュリアン伝」に描かれる様々な動物が念頭に浮かぶ。「聖ジュリアン伝」でとりわけ印象深い動物はジュリアンに呪いをかける牡鹿だろう。谷底の鹿の群れを一日がかりで殺

したジュリアンは、子鹿と牝鹿を連れた牡鹿に気付く。子鹿、牝鹿と射殺した彼に、額を射られた牡鹿は矢を立てたまま歩み寄り、「呪われろ」と三度告げ、お前は父母を殺すだろうと予言する（OCII. 181）。芥川はその「聖ジュリアン物語」においてこの牡鹿の描写が「殊に愛す可き中世紀の風格を帯びたり（角の沢山な枝に分かれている所など）」と誉めている。

本拙論では、芥川とフロベールの動物を比較する考察の前半部として、芥川の犬をとりあげる。芥川の犬嫌いは有名であり、彼が好む猫や河童[3]などと著しい対照をなしている。この芥川の犬との関係に、フロイトの動物恐怖の理論を適用してみたい。

II　芥川の犬恐怖

「風俗壊乱の性あり[4]」と言うのでも分かるように、芥川は犬を嫌った。「現代十作家の生活振り」の「草花・動物―その他」では、「犬は嫌いだ。犬も以前二匹飼ったこともあるが、今でも家で飼うことは構わないと思うが、余所の飼犬はどうも怖くて嫌いである」と言う。また「追憶」の短文「いじめっ子」には、「しかし小学校へはいるが早いか僕はたちまち世間に多い「いじめっ子」というものにめぐり合った。「いじめっ子」は杉浦譽四郎である。これは僕の隣席にいたから何か口実を拵えてはたびたび僕をつねったりした。おまけに杉浦の家の前を通ると狼に似た犬をけしかけたりもした。（これは今日考えてみれば Greyhound という犬だったであろう）僕はこの犬に追いつめられたあげく、とうとうある畳屋の店へ飛び上がってしまったのを覚えている」と記す[5]。明治四十三年四月、山本喜譽司宛では、共通の友人の見舞いに行くことを山本に依頼する芥川は、「あの黒犬さえいなければ僕も行くんだけれど」と書く。大正六年四月、佐藤春夫宛には、「唯犬に対してだけは　全然あなたと同感が出来ません　僕はストリントベルクと共に犬が大きらいです」と告げ、「あなたが犬さえ縛って置いて下されば、おたずねする気もあるのですが」と促す。さらに大正六年五月、鎌倉からの井川恭宛には、「こっちは莫迦に暖い　もう

夏らしくなった（すべてが）異人も大分はいりこんで来たがきれいな奴は一向いない　犬が皆気が荒くなって無暗に吠えるのは閉口だ」と嘆き、大正七年七月有田四郎宛には「あいつの所には小さいがよく吠える犬がいるでしょう　だから出来得べくんば君と一しょに出かけたいと思うのです」と願う。大正十二年三月、湯河原から小穴隆一宛に出した絵はがきには、町に新しい店が大分出来たが、「まだ行って見た事はありませんこの頃犬の交尾期の為夜は巨犬横行し郵便を出しに行くのも物騒なのです」と訴えている。書家の近藤浩一路の印象（「近藤浩一路氏」）に、「殆ど丸太のような桜のステッキをついていた所を見ると、いくら神経衰弱でも、犬ぐらいは撲殺する余勇があったのに違いない」と想う[6]のも、俳人井月について（「雑筆」 井月）、「憾むらくはその伝を詳にせず。唯犬が嫌いだったそうだ」と文を終えるのも合点が行く。

芥川のこの犬嫌いは作品の中にも見られる。「保吉の手帳から」の「わん」では、あるレストランでたまたま夕食の折、保吉の後ろに坐って話す海軍の武官ふたり（ひとりは保吉に給料を渡す主計官）が描かれる―「保吉は勿論その話に耳を貸していた訣ではなかった。が、ふと彼を驚かしたのは、「わんと云え」と云う言葉だった。彼は犬を好まなかった。犬を好まない文学者にゲエテとストリントベルグとを数えることを愉快に思っている一人だった。だからこの言葉を耳にした時、彼はこんなところに飼ってい勝ちな、大きい西洋犬を想像した。同時にそれが彼の後ろにうろついていそうな無気味さを感じた」。

この犬に対する芥川の反応に、フロイトが動物恐怖として扱うメカニズムを当て嵌めることができよう。フロイトの動物恐怖については、サルトルの蟹を扱った拙論[7]ですでに言及したが、「トーテムとタブー」でフロイトは、知人の研究者（M. ヴルフ）の論文を引き、父親への不安が犬に遷移した幼児の恐怖症の例をあげている。そこでの犬恐怖は masturbation を禁じる父とかかわる[8]。この犬恐怖の紹介の後、フロイトはハンス少年[9]に触れ、ついで恐怖を抱く動物への両価的感情についての一般論を述べている。拙論で引用した部分を新訳で示せば―「母親をめぐる競争から生じて来る憎悪は、少年の心の生活において制止されることなく広がっていけるわけではなく、それが向けられ

ている同一人物に対して以前から成立していた情愛や賛美と戦わねばならない。少年は父親に対する二重の[10]両価的（―アンビヴァレント―）な感情的態度のうちに位置しているが、自分の敵愾的不安感情を父親の身代わりに遷移することができるなら、この両価的な葛藤を軽減できる。もちろん、この遷移は、敵愾的感情から情愛をばっさりと切り離すというやり方で葛藤を処理するわけにはいかない。むしろ葛藤は遷移対象へ引き継がれるのであり、両価性（アンビヴァレンツ）はこの対象に移行していくのである。ハンス坊やが馬に不安ばかりでなく尊敬も興味も寄せたのは、紛れもない事実である。不安が緩和されると、彼はそれまで恐がっていた動物と同一化して馬になって跳ね回り、今度は父親に彼のほうから噛みつくのである[11]」。

Ⅲ　犬との同一化

母親を巡る競争とはむろん陽性のエディプス・コンプレクスであるが、父への両価的感情が、ある動物に移るのであって、その動物を怖れるけれども、同時にそれへの同一化と愛情とがうかがえる状態が動物恐怖と言いうる。芥川にも犬への愛情や犬との同一化が、犬への嫌悪や恐怖と併存してうかがえる。「保吉の手帳から」の「わん」では、保吉は犬を嫌いながら、物語の最後で、自分に俸給を払う主計官に「わんと云いましょうか？」と訊く。わんと云えと主計官がホームレスに促したことに対して義憤を感じての行為ではあるが、ホームレスを介して自分が犬になることを許容している。

また「白」は、体色が白から黒くなって、勇猛果敢な善行のすえ、白い体毛に戻る犬を主人公にしているが、作者の自己投影は明瞭で、同一化が見てとれる。大正十五年八月に軽井沢から室生犀星宛に添えた一句、「松風に白犬細うすぎにけり」には消耗した自分を犬に見立てた印象がある。さらに「犬と笛」は、葛城山の三人の神のそれぞれから、犬が好きだからとの理由で白犬の〈嗅げ〉、黒犬の〈飛べ〉、斑犬の〈噛め〉という三匹をもらい活躍する髪長彦の物語である。これら三匹の犬には主人公すなわち作者の愛情が注がれている。し

たがって芥川の犬全体を捉えれば両価性が認められる。

もっとも、次の例、犬への好悪は保留状態と言いうる―「夜は次第に明けて行った。〔略〕彼は一本の巻煙草に火をつけ、静かに市場の中へ進んで行った。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えかかった。が、彼は驚かなかった。のみならずその犬さえ愛していた。/〔略〕空には丁度彼の真上に星が一つ輝いていた。/　それは彼の二十五の年、―先生に会つた三月目だった（「或阿呆の一生」 十一夜明け）」。

漱石に自作を誉められて高揚した気分が「その犬さえ愛」させたのであり、寛容または余裕をもって犬に接しているのだろう[12)]。

Ⅳ　嗅　覚

犬との同一化の影響は嗅覚にも見られる。鋭い嗅覚は犬の特性であるが、森本修は、大水の被害者救済の費用を集めるため、第三中学の級友国富信一と先輩達を訪ねた芥川が、かなり遠くからでも犬を感知し、次の家は犬がいるから代ってくれと頼んだとの逸話を記している[13)]。もしも第六感でなければ、芥川は風の運ぶ臭いで、犬を嗅ぎつけたとおぼしい。「織田信長と小姓（仮）」の登場人物に芥川は次の如く語らせている―「僕の鼻はすばらしいんだよ。君たちは一町先にいる尨犬の匂いさえわからないだろう？　けれども僕は風下にいりゃ、三町先に蛙を呑んでいる蛇の匂いでもわかるんだぜ」。

随筆「夢」では、「僕は子供の時からずっと色彩のある夢を見ている。〔略〕それから夢の中には嗅覚は決して現れないと云う。しかし僕は夢の中にゴムか何かを燃やしているらしい悪臭を感じた」と述べる。嗅覚のある夢を感じたのはそれ一回だけと芥川は断るが、独自な嗅覚と言いうる。さらに「お辞儀」は次のように始まる―「保吉は〔略〕ふと過去の一情景を鮮かに思い浮べることがある。それは〔略〕たいてい嗅覚の刺戟から聯想を生ずる結果らしい。そのまた嗅覚の刺戟なるものも都会に住んでいる悲しさには悪臭と呼ばれる匂ばかりである。たとえば汽車の煤煙の匂は何人も嗅ぎたいと思うはずはない。けれ

ども〔略〕五六年前に顔を合せたあるお嬢さんの記憶などはあの匂を嗅ぎさえすれば〔略〕たちまちよみがえって来る」。

「あの匂い」とは何かといえば、前後関係を見て「煤煙の匂い」しかない。普通は好ましい香りや味によって回想が働くだろうから、芥川の嗅覚は鋭敏のみならず、やはり独自である。この嗅覚は、彼が自己を犬と同一化した結果生じたのか、逆に嗅覚が鋭敏かつ独自であるがゆえに自己を犬と容易に同一化できたのか？　この問いは措くとして、いずれにしろ嗅覚を司る器官である鼻が芥川においては重要な意味を担っている[14)]。

Ⅴ　エディプス

エディプスそのものに話を移し、まず母への男子の対象愛をみよう。

「ジュリアノ・吉助」では、聖母マリアに恋するイエスが言及される―「奉行「そのものどもが宗門神となつたは、いかなる謂れがあるぞ」／　吉助「えす・きりすと様、さんた・まりや姫に恋をなされ、焦れ死に果てさせ給うたによつて、われと同じ苦しみに悩むものを、救うてとらせうと思召し、宗門神となられたげでござる」。

さらに「侏儒の言葉」に「或孝行者」のタイトルでこう記される―「彼は彼の母に孝行した、勿論愛撫や接吻が未亡人だった彼の母を性的に慰めるのを承知しながら」。

芥川の実母フクの死去は明治三十五年（1902）、実父新原敏三の死去は大正八年（1919）ゆえ[15)]、実母は未亡人にはなれない。他の親子がモデルであるか、虚構だろう。しかし同様の記述が「歯車」にみられる―「僕は二冊の本を抱え、或カッフェへはいって行った。それから一番奥のテエブルの前に珈琲の来るのを待つことにした。僕の向うには親子らしい男女が二人坐っていた。その息子は僕よりも若かったものの、殆ど僕にそっくりだった。のみならず彼等は恋人同志のように顔を近づけて話し合っていた。僕は彼等を見ているうちに少くとも息子は性的にも母親に慰めを与えていることを意識しているのに気づき出し

た」。

「侏儒の言葉」とは違い、主人公である＜僕＞は息子に自分を投影している。これは芥川のエディプスの、母への対象関係を推測させる。また、屈折した形での陽性エディプスの表出が、「老いたる素戔嗚尊」に見出せる。素戔嗚は夢で道端の鏡に自分を映す―「大岩の上に〔略〕白銅鏡が一面のせてあった。彼はその岩の前に足をとめると、何気なく鏡へ眼を落した。鏡は〔略〕年若な顔を映した。が、それは〔略〕彼が何度も殺そうとした、葦原醜男の顔であった」。

ここには娘の恋人と成り代わる欲求がうかがえる。そして父と娘の愛が許されるなら、当然母と息子のそれも許されるとみなす狡智が潜んでいる。

Ⅵ　トリアード１

「歯車」には、主人公の＜僕＞とその姉、姉の夫を三角形とするエディプスを推定できる。物語の冒頭、知人の結婚披露宴に向かう＜僕＞は、一緒の車に乗った人からレエン・コオトを着た幽霊について聞かされる。以後＜僕＞を悩ますこのレエン・コオトを着た幽霊とは、実は＜僕＞の姉の夫、つまり義兄である。もっとも義兄という言葉は使われない。この義兄の鉄道自殺を、＜僕＞は披露宴の行なわれたホテルで知らされる。

まず姉は母の姿を担ってもおかしくはない。亡くなった姉ハツは母のイメージを湛えているからである―「僕はなぜかこの姉に、―全然僕の見知らない姉に或親しみを感じている。〔略〕四十を越した「初ちゃん」の顔は或は芝の実家の二階に茫然と煙草をふかしていた僕の母の顔に似ているかも知れない。僕は時々幻のように僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこかから僕の一生を見守っているように感じている（「点鬼簿」二）」。

次に、義兄に関してだが、幽霊につきまとわれるのは、生前相手を害したため、というのが通例だろう。現実には飛び込み自殺ではあれ、心的現実としては＜僕＞が自分の父として殺したか殺意を抱いたがために、＜僕＞は義兄を怖

れると解釈できよう。この義兄と＜僕＞は対立していた―「体の逞しい姉の夫は人一倍痩せ細った僕を本能的に軽蔑していた（二　復讐）」。

しかし他方、この義兄に＜僕＞は自己を重ねている―「姉と話しているうちにだんだん彼も僕のように地獄に堕ちていたことを悟り出した。彼は現に寝台車の中に幽霊を見たとか云うことだった」。

それ以前に＜僕＞はホテル到着後、自己と義兄を同一視しているようにも取れる―「僕は壁にかけた外套に僕自身の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣裳戸棚の中へ抛りこんだ。それから鏡台の前へ行き、じっと鏡に僕の顔を映した。鏡に映った僕の顔は皮膚の下の骨組みを露していた」。

ホテルで＜姉の娘[16]＞によってなされる義兄の自殺の知らせ（一　レエン・コオト）には、ホテルのスリッパが片方なくなる場面（二　復讐）が続き、「その恐怖だの不安だのを与える現象」は、＜僕＞にサンダルを片方だけ履いたギリシア神話の王子[17]を想わせる。この王子イアソンは、アルゴ船団を組み、黒海東岸のコルキスまで金の羊毛皮を探しに行く英雄だが、そもそも羊を探すのは、本来彼が着くべき王座を父の異母兄弟が占め、金羊毛と交換に王座を譲ると約したからである。イアソンの片足のサンダルが脱げたのは、川を渡るとき女神ヘラが化けた老婆を背負ったゆえという。

サンダルは、翼の生えたサンダルを作者の連想に呼ぶ―「彼は絶え間ない潮風の中に大きい英吉利語の辞書をひろげ、指先に言葉を探していた。/Talaria翼の生えた靴、或はサンダアル（「或阿呆の一生」六　病）」。

ならば、サンダルを脱がすことは飛翔への攻撃で在り、イカロスの翼（五　赤光）を奪うに等しかろう―「そのうちに或店の軒に吊った、白い小型の看板は突然僕を不安にした。それは自動車のタイアアに翼のある商標を描いたものだった。僕はこの商標に人工の翼を手よりにした古代の希臘人を思い出した。彼は空中に舞い上った揚句、太陽の光に翼を焼かれ、とうとう海中に溺死していた。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、―僕はこう云う僕の夢を嘲笑わない訣には行かなかった。同時に又復讐の神に追われたオレステスを考えない訣にも行かなかった」。

轢死で亡くなった義兄は＜僕＞の父と等価であり、父殺しの罰としてサンダルの剝奪が、母のイメージが姉から移行した老婆（女神）、おそらくは復讐の神によってなされる、それが作者の連想であろう。愛想を尽かされイアソンとの子供二人を殺す王女メディアを復讐の神と重ねるのはサンダルとの結びつきが弱いと思われる。またオレステスはその父の従兄弟であるアイギストスと共謀して父アガメムノンを殺した母を殺し、復讐の神エリュニュスたちに追われる。その場合エリュニュスらを母の怨念としても、その怨念にエディプスはかかわりがたい。さらにオレステスとイアソンは、父の血縁の男によって父が殺されるか父の王位を奪われるかという点で両者ともハムレットに近付くが、ハムレットにフロイトが察知する母への対象愛[18]が欠けている。

さて、この母は父ゆえに＜僕＞を罰する。そういう母は＜僕＞の攻撃の対象であり、たとえば、『罪と罰』の主人公が殺す金貸しの老婆を女神ヘラと等価としえなくはない。老婆を登場人物とした作品が芥川には多いが、大正十五年、十一月二十九日の佐々木茂作宛には「君が余り気を使ってくれると、それが反射して苦しくなる事もある。（手紙ばかりなら助かるだけだが）何しろふと出会った婆さんの顔が死んだお袋の顔に見えたりするので困る」と記す。あるいは関係するかもしれない。

Ⅶ　トリアード２

犬が男と重なり、三角関係の一項をなす場合がある。鷗外の『雁』を想わせる「奇怪な再会」では、本所に囲われたお蓮のもとへ陸軍主計官の牧野が通う。お蓮は中国の妓館にいたのを、牧野が密入国させたのである。本国で別れた愛人（名を金という）の身を案じる彼女に占い師は、東京が森か林に変じれば会えるかも、と言う。ある日迷い込んだ犬は、中国での愛犬と重なる。お蓮が抱いた犬が震えると、「それが一瞬間過去の世界へ、彼女の心をつれて行」く。次に手伝いの婆さんの訴えがこの犬を擬人化する―「その時分から私は、嫌だ嫌だと思っていましたよ。何しろ薄暗いランプの光に、あの白犬が御新造の寝

顔をしげしげ見ていた事もあったんですから」。

さらに以前飼っていた犬と今度の犬とを男に見立てるのは牧野とお蓮である—「美男ですよ、あの犬は。これは黒いから、醜男ですわね」/「男かい、二匹とも。ここの家へ来る男は、おればかりかと思ったが、—こりゃちと怪しからんな」。

お蓮にも「何だかその眼つきが、人のような気がしてならな」い。犬が病み、お蓮が犬に囁く姿がみられる。その犬にも死なれ、憂鬱になり、彼女は妙な幻覚に悩みだす—「その時また往来に、今度は前よりも近々と、なつかしい男の声が聞えた。と思うといつのまにか、それは風に吹き散らされる犬の声に変っていた」。

ある日訪れた牧野の友人は、牧野がお蓮の愛人を「暗討」にしたのだと口をすべらせる。燃え上がった牧野への殺意をなだめる声は、愛人が存命で、明日弥勒寺に会いに来ると告げる。出かけたお蓮は「東京も森になった」と呟き、すでに正気ではない。偶然現れた子犬を、彼女は本国での愛犬だと信じ込んで連れ帰り、夜灯りをつけると子犬のいた場所には煙管をくわえた愛人がいる。お蓮は入院後も、犬がいなければ愛人の名を呼ぶ。

物語の最後では、本国での愛犬も、迷い込んだ子犬も、弥勒寺で拾った子犬も、お蓮の主観の中では愛人と重なっている。牧野の友人の言から、愛人であった中国人金を殺したのは牧野である。迷い込んだ犬の死因に関しては、物語の最後に医師らしい者の言葉がある—「え、金はどうした？　そんな事は尋くだけ野暮だよ。僕は犬が死んだのさえ、病気かどうかと疑っているんだ」。

これは牧野による子犬の毒殺を仄めかす文句だろう。お蓮の愛は迷い込んだ子犬（＝昔の愛人）に注がれているが、牧野は無関心でいるように見えて内心では嫉妬し、お蓮の愛人を殺したように密かに子犬を毒殺したことになる。精神疾患で入院するお蓮を芥川の母とすれば、名前が牛に関係する牧野が父、お蓮の愛人かつ迷い込んだ子犬（これは他の二匹と結果的には連なる）が芥川自身という布置になろう。また子犬に囁くお蓮を、手伝いの婆さんは牧野に囁くのだと誤解し、隣に寝る牧野をお蓮は愛人と取り違える。すなわち子犬も愛人

もそれぞれ一瞬ながら牧野と同一化される。この作品では潜在的ながら父が母を奪われまいと母の愛人である男子を殺すわけだが、陽性エディプスでの母子関係に対する罰として殺人（犬）を解釈しうる。

Ⅷ　トリアード 3

犬を含む三角関係が、顕在的にみられるのは、「奇怪な再会」より四年前に書かれた「素戔嗚尊」である。高天が原を去った素戔嗚は、十五人[19]の妹たちと暮らす大気都姫と出会い、一夜を皆と過ごす。女達からは「死穢を隠すために、巧な紅粉を装っている、屍骨のような」印象を受けながらも、「この春のような洞窟の中に、十六人の女たちと放縦な生活を送るようになる」。ある日、大気都姫の寝顔が「垂死の老婆」同然に見える。死穢やこの死顔は、女達との放縦な生活への自責ゆえだろう[20]。彼は洞窟を去るが一日で戻る。その後一年して、女達は「全身まっ黒な、犢ほどもある牡」犬[21]を飼い始める。女達は、「殊に大気都姫は、人間のようにこの犬を可愛が」り、素戔嗚と同じ盤や瓶を犬の前に置くほどになる。ここで大気都姫を介して、素戔嗚と黒い犬の同一化がなされていよう。ある朝滝壺に降りていく彼はその犬の不届きな行為を目に剣を抜く。しかし女達に邪魔される。そのあと、夜の酒盛りに女達が奪い合うのは素戔嗚ではなく黒犬になる。「彼の心は犬に対する、燃えるような嫉妬で一ぱい」となる。素戔嗚は、犬と戯れている女達を前に抜刀し、彼女らが妨げるのを振り切って犬を刺そうとするが、刀を奪おうとする大気都姫の胸を刺してしまう。

物語のこの水準で、素戔嗚尊、十六人の女性を代表する大気都姫、それに犬は顕在的な三角関係を構成する。大気都姫との出会いに、素戔嗚の発する第一声は食事にかかわる―「おれは腹が減っているのだ。食事の仕度をしれい」

大気都姫、すなわち大宜都比売は、『古事記[22]』に寄れば、食事を司り、不浄の身体部位から食物を出したため素戔嗚に殺される神である。飢えた素戔嗚に食べ物を与える彼女は母のイメージを持つと言えよう。彼女の愛を奪うが故

に素戔嗚が激しく嫉妬する黒い犬は、その牛に連なるイメージから、牛乳販売業を営んでいた芥川の実父新原敏三につながる。

素戔嗚は、高天原で、若者達と力競べをする。どれだけ矢を高く空に飛ばすか、どれだけ広い川を飛び越えるか、どれだけ重い岩を持ち上げるかを競う。しかし、相撲はしない。その素戔嗚が犬を相手に相撲を取る―「彼も始は彼等と一しょに、盤の魚や獣の肉を投げてやる事を嫌わなかった。あるいはまた酒後の戯れに、相撲をとる事も度々あった。犬は時々前足を飛ばせて、酔い痴れた彼を投げ倒した」。

これは、『点鬼簿』の次の一節を想起させる―「僕の父は又短気だったから、度々誰とでも喧嘩をした。僕は中学の三年生の時に僕の父と相撲をとり、僕の得意の大外刈りを使って見事に僕の父を投げ倒した。僕の父は起き上ったと思うと、「もう一番」と言って僕に向って来た。僕は又造作もなく投げ倒した。僕の父は三度目には〔略〕血相を変えて飛びかかって来た。この相撲を見ていた僕の叔母〔略〕は二三度僕に目くばせをした。僕は僕の父と揉み合った後、わざと仰向けに倒れてしまった」。

「或阿呆の一生」の「三十二　喧嘩」には「彼は彼の異母弟と取り組み合いの喧嘩をした」とあるが、それは喧嘩であり相撲ではない。この父との相撲は、素戔嗚と黒犬のそれにつながる。フロイト的に見れば、両価的な感情を抱く父を殺し、母を奪うのが単純な陽性エディプスであろうが、ここではライヴァルたる父を殺そうとして、誤って母を刺すという行為がなされている。つまり動機としては父殺し、結果としては母殺しとなろう。大気都姫は素戔嗚に殺される運命だろうが、芥川の小説においては、不浄の身体から食べ物を出したからではなく、父を庇う母として刺される点が重要だろう。

ところで、芥川の素戔嗚は不思議なことに八岐大蛇を退治しない。大蛇が現れる気配で物語は閉じられる。「老いたる素戔嗚尊」では当然ながら大蛇退治は終わっている。これは何を意味するだろうか。最も単純な答は「今では、一匹の犬が、彼の死敵のすべてであった」との素戔嗚の反省から察しうるように、犬との闘いは大蛇との闘いの代理をなすとの解釈だろう。ではなぜ代理をなす

のか。まず、おそらく大蛇は龍と変換可能である。「比呂志との問答」と題する一文で、鼠の嫁入りに類する次のようなやり取りが描かれている―「僕は鼠になって逃げるらあ。/じゃあ、お父さんは猫になるから好い。/そうすりゃこっちは熊になっちまう。/熊になりゃ虎になって追っかけるぞ。/　何だ、虎なんぞ。ライオンになりゃ何でもないや。/　じゃお父さんは龍になってライオンを食つてしまう。/　龍？（少し困った顔をしていたが、突然）好いや、僕はスサノヲ尊になって退治しちまうから」。

辰年辰月辰日辰刻に生まれ龍之介と名付けられた[23]彼は龍に自己の理想的なイメージを投影していたかもしれない。沖本常吉によれば、芥川の実父新原敏三の弟筋にあたる三十代の人が芥川にそっくりで、「面長な顔立ち」と「高い鼻筋の通っていること」を特徴としているという[24]。察するに馬を想わせるのであって、水洟や鼻の先だけ暮れのこる、を賛とした芥川の自画賛像では、彼の顔は馬に似ている[25]。そうして馬から龍までは、龍影、龍駒、龍姿、龍馬などというように直結する。馬の長い首から鼻の先までが龍を連想に呼ぶからだろう。芥川は無意識的か意識的かは措くとして、自分の名前や容貌を介して龍を理想の自己イメージとした可能性がある。「素戔嗚尊」で、芥川は素戔嗚に自己を投影している。その自分が、理想の自己イメージを体現する龍につながる大蛇を殺すことは、けだし自滅するに等しかっただろう。

IX　まとめ

芥川龍之介には犬に対する両価的感情がみいだされ、これはフロイトのいう動物恐怖に対応する。動物恐怖は、エディプス状況を前提とし、同時に castration 不安を含意しうる―「去勢およびその代替である目潰しが、父親から脅かされている懲罰である[26]」。

犬をなかだちに芥川のエディプスを分析したが、castration 不安はどうであろうか？　「拊掌談」の「犬」には、芥川の castration 不安が直接見て取れる―「日露戦争に戦場で負傷して、衛生隊に収容されないで一晩倒れていたもの

は満洲犬に」まずは局部を喰われ、「次に腹を食われる。これは話を聞いただけでもやり切れない」と記されている。

こうしてエディプスおよびcastration不安を彼の犬恐怖の背後に確認できる。ただし芥川のエディプスは単なる陽性エディプス―母に対する愛、父に対する両価的感情―であるのみならず、母に対する否定的感情を伴っている。触れたごとく、「歯車」では、心的現実として父（義兄）を殺した＜僕＞を罰する母（女神）が、「素戔嗚尊」では父（黒犬）を刺そうとする素戔嗚を妨げ、素戔嗚に殺される母（大気都姫）がいる。フロイト理論から見れば、父の代理人としてエディプス期の男子を脅かす母が「歯車」と「素戔嗚尊」では描かれている可能性が高い[27)]。

むろん、母から乳をもらえなかったこと（「大導寺信輔の半生」）、「母に全然面倒を見て貰ったことはな」く、「一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行ったら、いきなり頭を長煙管で打たれたこと（「点鬼簿」）などがネガティブな母親像を作り出す要因であったろう。また母からの授乳の欠如にメラニー・クラインの理論を適用する余地がある。この悪い母を「黒衣聖母」のマリア像や「女」の蜘蛛や「河童」の雌に敷衍できるかもしれない。さらに芥川には実母のほかに、実母同然だった伯母、それに養母、妻、妻以外の女性達もいる[28)]。実母を含め芥川を取り巻く女性達と動物との関係はどう解釈すべきか[29)]。これらは残された問題である。

註

1）芥川の著作は、ちくま文庫版八巻に拠り、旧岩波版全集で補い、必要に応じて新版岩波版全集を参照した。なお〔略〕は引用者青木による省略を、/は原文での改行を示す。ただし引用文の両端にはこれらを用いない。また縦書きの際の繰返し記号くは、対応する文字の繰返しに変えた。

2）フロベールの作のうち *FLAUBERT Œuvres de jeunesse*, BIBLIOTTHÈQUE DE LA PLÉIADE, nrf, Gallimard, 2001に収録された作品についてはこれから引用し、この巻の略号をOJ.とする。この巻に抄録されていない作品に関しては二巻本の *FLAUBERT œuvres complètes*, Seuil, 1964（略号OCI., OC II.）を使用する。略号に続く数字は頁を示す。

3）猫に関しては、「好きな動物？　猫を飼っている。御覧に入れましょうか。西洋種の虎のような毛色をした、大きい奴（「私の生活」）」とある。芥川の残した絵や俳句を見れば河童への愛着は言わずもがなだが、たとえば大正九年九月、小穴隆一への葉書に、「この頃河童の画をかいていたら河童が可愛くなりました」との言葉がみられる。

4）「これは「言海」の猫の説明である。/「ねこ、（中略）人家ニ畜フ小サキ獣。人ノ知ル所ナリ。温柔ニシテ馴レ易ク、又能ク鼠ヲ捕フレバ畜フ。然レドモ窃盗ノ性アリ。形虎ニ似テ二尺ニ足ラズ。（下略）」/成程猫は膳の上の刺身を盗んだりするのに違いはない。が、これをしも「窃盗ノ性アリ」と云うならば、犬は風俗壊乱の性あり（「澄江堂雑録」猫）」。（中略）（下略）は芥川のもの。

5）関口安義は、この出来事が芥川の犬嫌いの原点ではないかと推測する。関口安義編、『芥川龍之介新辞典』、翰林書房、2003年、15頁。

6）犬を追っ払うため芥川が使ったという籐のステッキに宇野浩二は言及している。（筑摩叢書、『芥川龍之介』、1967年、113頁）

7）「サルトルにおける蟹のイメージについて」、『人文論叢34号』、京都女子大学人文・社会学会発行、1986年、25-28頁。

8）「トーテムとタブー」、『フロイト全集12』、岩波書店、2009年、165-166頁。

9）「ある五歳児の恐怖症の分析」、『フロイト全集10』、岩波書店、2007年。なお上記拙論を参照されたい。

10）「もともと同一化に含まれていた両価性（アンビヴァレンツ）が今やはっきりと姿をあらわしてきたかのような観を呈する」と「自我とエス」（『フロイト全集18』、岩波書店、2007、p. 28.）にはある。おそらく母への対象選択以前にもすでに父との同一化が行なわれるが、父との完全な同一化は、男子の自己同一性の消滅をもたらすがために完遂されず、自ずから父に対する両価的感情が生まれる、そうフロイトは言いたいのではないか。

11）「トーテムとタブー」、『フロイト全集12』、既出、167頁。

12）「鵠沼雑記」に描かれる不気味な犬は、フロイトの動物恐怖の理論のみでは了解しがたいと思われる―「僕は全然人かげのない松の中の路を散歩していた。僕の前には白犬が一匹、尻を振り振り歩いて行った。僕はその犬の睾丸を見、薄赤い色に冷たさを感じた。犬はその路の曲り角へ来ると、急に僕をふり返った。それから確かににやりと笑った」。

13）森本修、『新考・芥川龍之介伝』、北沢図書出版、1971年、93頁。

14）Ａ．芥川の犬との同一化に嗅覚が関係していることとは別に、犬と人間の鼻が関係づけられる小説として、少なくとも「鼻」と「芋粥」がある。「鼻」では内供の鼻は「五六寸あって、上唇の上から顎の下まで下がっている」。皆に嘲笑されるこの鼻を内供は短くするが却って笑われる。不機嫌になった彼は、鼻

を持ち上げるのに使っていた木片で、「中童子」が、「鼻を打たれまい、それ、鼻を打たれまい」といいつつ、やせた尨犬を追い回しているのに出くわす。ここで内供の嘲られる鼻は尨犬の鼻づらと重なるだろう。また「芋粥」の主人公の五位は赤鼻で、軽蔑されつつ「犬のような生活を続けてい」る。ある日、子供たちがいじめる尨犬を五位は庇うが、その犬は彼の分身だろう。物語末尾で彼は、芋粥を飲む狐を前に、京童に赤鼻とののしられ「飼主のない尨犬のように、朱雀大路をうろつ」く自分を思い、鼻を押さえてくしゃみをする。五位の鼻も内供の鼻同様、尨犬の貧相な鼻と等価である。

B．有名な「水洟や鼻の先だけ暮れ残る」の句について山本健吉は、「「鼻」の作者に鼻の句があるのは当然であり、「僕も亦人間獣の一匹である」と言った彼は、顔の中の鼻の部分に動物的なものの名残を意識することが度々あったかも知れぬ」という（ちくま文庫版『芥川龍之介全集８』解説）。卓見であろう。けれども芥川の意識は口にも及ぶ。「あの頃の自分のこと」で芥川は谷崎潤一郎の顔を「動物的な口と、精神的な眼とが、互に我を張り合つているような」と形容し、「戯作三昧」では馬琴の顔を「下顎骨の張った頬のあたりや、やや大きい口の周囲に、旺盛な動物的精力が、恐ろしい閃きを見せている」と描く。これらは鼻と口とが一体であるライオンや犬など肉食獣の口を想起させる。

鼻と口とが表裏一体をなす作品として「ひょっとこ」があげられる。平吉は「酒さえのめば気が大きくなって、何となく誰の前でも遠慮が入らないような心持ちにな」り、ひょっとこの面を付けて踊る癖がある。気が大きくなること、過剰な自尊心あるいは優越感を持つことは、ひょっとこの口に象徴される。酔って面を付け隅田川の舟で踊る彼は脳溢血で倒れる。その際、面がはずれ、尖った口を失うことは「小鼻が落ちる」ことに等しい―「面の下にあった平吉の顔はもう、ふだんの平吉の顔ではなくなっていた。小鼻が落ちて、唇の色が変って、白くなった額には、油汗が流れている。〔略〕ただ変らないのは、つんと口をとがらしながら、〔略〕静に平吉の顔を見上げている、さっきのひょっとこの面ばかりである」。

口の延長部分が主題となる作品に「煙管」がある。前田斉広は、江戸城登城の際金無垢の煙管を身につけ、それを得意としていた。「彼はそう云う煙管を日常口にし得る彼自身の勢力が、他の諸侯に比して、優越な所以を悦んだのである。つまり、彼は、加州百万石が金無垢の煙管になって、どこへでも、持って行けるのが、得意だった」のであり、この場合も口の先に自尊心あるいは他人への優越感が宿っている。

15）関口安義、略年譜、『新潮日本文学アルバム13　芥川龍之介』、1983年。

16）関口安義『芥川龍之介新論』（翰林書房、2012年、183頁）によれば、<姉の娘>での娘とは、その年齢から見て、芥川の実姉ヒサと、轢死した西川との娘、

瑠璃子ではなく、ヒサとその先夫葛巻義定との娘、さと子であるという。

17) 次の論文を参照した。加藤明、「「歯車」論―ギリシア神話の暗号をもとに―」、『日本文学』、日本文学協会、1984年。三嶋譲、「「歯車」解読（一）」、『福岡大学日本語日本文学会』、1996年11月。同「歯車解読（二）」、『福岡大学総合研究所報』第205号、福岡大学総合研究所、1998年３月。同「『点鬼簿』を読む-＜母＞の物語から＜父＞の物語へ」、『福岡大学日本語日本文学』３、1993年10月。同「『点鬼簿』補説-虚構のゆくえ」、『福岡大学日本語日本文学』４、1994年12月。ギリシア神話に関しては：PIERRE GRIMAL, *DICTIONNAIRE DE LA MYTHOLOGIE GRECQUE ET ROMAINE*, PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE, 1951。

18) cf.『フロイト全集４』、岩波書店、2007年、345頁。

19)「妹たちは大勢いるのか」/「十六人居ります」は誤り。

20) 最終的に洞窟を去って湖の畔に佇む彼には「穢れ果てた自己に対する、憤懣よりほかに何もなかった」とあり、「素戔嗚はその湖の水を浴びて、全身の穢れを洗い落した」とある。

21) この犬は一種の妖犬であろうが、芥川の「椒図志異」では、犬と狐が変換可能な存在として扱われている―「５．藤村栄次郎と云ふ経師屋　さる御邸にて鮭の頭を五つ六つもらひ　こも縄にてぶらさげ、今江木写真店となれる土橋わきのどんどんに差かゝりしに、鮭の頭をさげし手、千百斤のものをひくやうにて重さ堪へ難かりしかば他の手に持ちかゆるに　再重くなること前の如し　さては狐の仕業よと心づきて小脇にかゝへ　これにて大丈夫なりとあゆみゆくに大なる犬一匹道のただ中に伏せるがありしが何としけむ誤ちてその尾をふみしかば　犬忽けたゝましく吼えてとび起くるに　度を失ひて二足三足跡へさがると見れば犬の姿は煙の如く失せて　小脇にしたる鮭の頭もいつしか見えずなりけるとなり」。つまり、犬は狐と違わない。しかし、芥川が養母に聞いたというほぼ同様の話では、犬は狸である―「酒に酔った経師屋の職人が一人〔略〕折りか何かをぶら下げながら、布袋屋の横町へさしかかると、犬が一匹道端に寝ていた。犬は職人が通りかかるが早いか、突然尾でも踏まれたようにきゃんと途方もない大声を出した。職人は勿論びっくりした。するといつか下げていた折も足もとの犬も見えなくなっていた。これは狸が折りを盗むために職人を化かしたとかいう噂だった（「猪・鹿・狸」）」。

22)『古事記』、日本思想体系本、岩波書店、1982年、25頁、29頁、 54頁、339頁。

23)「略年譜」、『新潮日本文学アルバム13　芥川龍之介』、既出。

24)『芥川龍之介以前・本是山中人』、東洋図書出版株式会社、1977年、347-348頁。

25)『芥川龍之介以前・本是山中人』、319頁。なお芥川は大正六年二月に新潮社の中村武羅夫宛に、しばらく鞭を振るうのを止め「疲馬」を休ませてくれと、自

己を馬に見立てている。また「LOS CAPRICHOS」の「疲労」という短文では、龍騎兵の疲れた白馬を軽蔑する二頭の尨犬が見られる―「どうだい、あの白馬の疲れようは？」/「莫迦々々しいなあ。馬ばかりが獣じゃあるまいし、――」/「そうとも、僕等に乗つてくれれば、地球の極へも飛んで行くのだが、――」/　二匹の犬はこう云うが早いか、龍騎兵の士官でも乗せているように、昂然と街道を走って行った」。

この文では犬と馬と龍（騎兵）が揃っている。作者は犬と自己同一化し、その犬は疾駆する馬と、馬は龍と自己を同一化すると言えまいか。さらに「「Lies in Scarlet」の言 /―Arthur Hallwell Donovan―」には次のようにある―「もしプラトニック・ラヴと云うものがあったら、自分は必人間より馬に惚れたのに相違ない」。

26)「トーテムとタブー」、既出、168頁。 なお「目潰し（独 Blendung）」は新訳の方が適切であろう。

27)「母はすでに、子どもの性的興奮が自分に向けられていることをよく理解している。いつからか母は、これをそのままにしておくのは正しくないと意識するようになる。母は、子どもが自分の性器を手で弄ぶのを禁止するのが正しいと思う。この禁止はあまり功を奏せず、せいぜいのところ、子どもが自分を満足させるやり方が変わる程度のことしかもたらさない。ついに母はもっとも容赦ない手段に訴え出て、彼が反抗に用いている当のものを切断してしまうと脅す。通常母は、この脅しがより恐ろしく本当らしいものとなるように、脅しの実行を父に委ねる。母は父にいいつけ、父は男性器を切り取るだろう、というわけである。不思議なことに、この脅しは、この前後に他の条件もさらに加わったときにのみ、有効に働く。〔略〕彼は、去勢コンプレクスの影響下にはいることにより、年少期における最大の外傷を体験する（「精神分析概説」、『フロイト全集22』, 岩波書店, 2007年、230-231頁）」。cf. 拙論「「赤と黒」のジュリアンの首　―スタンダールのフェティシスム―」、『人文論叢36号』、京都女子大学人文・社会学会発行、1988年、32-34頁。

28) 特に次を参照した：高宮檀、『芥川龍之介の愛した女性』、彩流社、2006年。

29) すぐ念頭に浮かぶのは実母と狐だろう。犬に関しては、「淑図志異」の（魔魅及天狗　5）に、わが父幼き頃の物語として、人見孫兵エという役人が城から帰り、茶をすすめる妻を見ると顔が犬だったので斬ると妻に戻った話が見える。芥川は、未定稿の「犬（仮）」で、人見孫兵衛という者が帰宅すると出迎えた妻の顔が獣なので斬ったと、「淑図志異」の話をほぼ原型のまま載せている。妻も妖犬となりうる。

参照した文献（本文で触れたものは除く）

中村真一郎、『芥川龍之介の世界』、角川文庫、角川書店、1968。
岩井寛、『芥川龍之介、芸術と病理』、＜パトグラフィー叢書２＞、金剛出版、1969。
蓮實重彦、「接続詞的世界の破綻」、『国文学』11月号、學燈社、1970。
吉田精一、『芥川文学―海外の評価―』、早稲田大学出版部、1972。
塩崎淑男、「芥川龍之介」、宮本忠雄編『診断・日本人』、日本評論社、1974。
森啓祐、『芥川龍之介の父』、桜風社、1974。
監修吉田精一・福田陸太郎、編者富田仁、『比較文学研究　芥川龍之介』、1978。
吉田精一、「芥川龍之介 I」、『吉田精一著作集　第一巻』、桜風社、1979。
吉田精一、「芥川龍之介 II」、『吉田精一著作集　第二巻』、桜風社、1981。
柄谷行人、「芥川における死のイメージ」、『国文学』5月号、學燈社、1985。
三好行雄、「芥川龍之介論」、『三好行雄著作集　第三巻』、1993。
小山田義文、『世紀末のエロスとデーモン　芥川龍之介とその病い』、河出書房新社、1994。
佐古純一郎、『芥川龍之介の文学』、朝文社、1995。
関口安義、『芥川龍之介』、岩波新書、岩波書店、1995。
柳田國男、「山島民譚集」、『柳田國男全集２』、筑摩書房、1997。
春原千秋・梶谷哲男、「芥川龍之介」『精神医学からみた作家と作品』＜新装版＞、牧野出版、1998。
宮坂覺、『芥川龍之介　人と作品』、翰林書房、1998。
宮坂覺篇、『芥川龍之介作品論集成　第６巻　河童・歯車』、1999。
関口安義、『芥川龍之介の素顔』、EDI 学術選書、イー・ディー・アイ、2003。
高宮檀、『芥川龍之介の愛した女性』、彩流社、2006。
小島正二郎、『芥川龍之介』、講談社文芸文庫、2008。
山崎光男、『藪の中の家　芥川自死の謎を解く』、中公文庫、中央公論新社、2008。
ドナルド・キーン、「芥川龍之介」、『日本文学史　近代・現代篇三』、中公文庫、中央公論新社、2011。